

リレー随筆

「はじめての海外と国際学会」

鹿児島大学病院 小児外科 矢野 圭輔

昨年度、国際学会 (24th International Pediatric Colorectal Club Meeting, European Pediatric Association Conference 2017) に初めて参加した。それまで私は海外に行ったことがなかったので、私にとって初めての海外旅行が、初めての国際学会でもあった。最近の医学部学生や研修医は、長期休みや卒業旅行で海外に行くのが珍しくないのだから、私のように卒業5年目になった年ようやく初めての海外を経験するというのは、かなり珍しいと言える。しかも、学会が開催されたのは、キプロスのリマソールであった。海外旅行先として、日本人にはあまり馴染みがない土地なので、“キプロスのリマソール”と聞いて、そもそもそれが地球儀のどこにあたるのか、即座に頭に思い浮かぶ人は少ないだろう。初めての海外でみんなあまり行き慣れていない国へ行き英語の発表をしてくる、という事態となり、出発前には周囲の方々にもかなり心配されたが、幸いにも大きなトラブルに遭うことなく無事に帰ってくることができた。それだけでなく、新鮮な気持ちで多くのものごとを見聞きし肌で感じ、貴重な体験をすることができたと思っている。

改めて、渡航前に購入した「地球の歩き方 2017～2018年版 ギリシアとエーゲ海の島々 & キプロス」を手にとってみた。帰国して1年経過した今になって、もう一度読み返してみると、再び訪れてゆっくり観光したいと思うほどに、キプロスという国もリマソールという町も大変興味深い。以下、キプロスの基本情報について、「地球の歩き方」から抜粋し説明する。

キプロス共和国 (Cyprus) は面積が四国の

半分とほぼ同じ大きさで、人口119万人の地中海の島国である。国土の4割近くが森で、中央にはオリンポス山を中心に山岳地帯が広がり、豊かな大地と海の幸に恵まれている。地中海性気候に属し、一番寒い1月でも平均気温が10℃と温かく、乾燥していて雨もあまり降らないため、雲一つない青空が広がる日が多い。それゆえ、主にヨーロッパから、多くの人々が訪れているリゾート地である。また、ギリシア神話に登場するアフロディアが生まれた場所とされており、1万年の歴史を刻む古代遺跡もあり、神聖で歴史的な観光地としても有名である。ブドウの栽培に適した気候の土地であり、古代遺跡の周辺にブドウ



会場になっていたコロッシ城

畑が広がり、ワイン造りが5000年以上前から行われていたようである。それを証明する遺跡も発見されており、現在もワイン造りは主要な産業のひとつである。

通貨はユーロで日本との時差は6時間。日本からの直行便はないので、ヨーロッパの主要都市を経由して入国する。海を挟んで東側にはシリアがあるが、治安は比較的良いようだ。ただし、1974年の紛争の結果、キプロス国土には、グリーンラインと呼ばれる南北を分断する線が引かれ、国連軍が警備している。現在、再び紛争が起きる可能性は低いようだが、グリーンラインを跨いで国内を移動するようなことがあれば注意を要し、北キプロスから国外へ出ることは違法である。さらに、日本は北キプロスを独立国と認めていないた

め、日本人が北キプロスでトラブルに遭っても救援活動の介入は難しいらしい。首都はビジネスの中心地であるニコシア、国際空港があって空の玄関口となるのはラルナカであり、学会の開催地のリマソールは第2の都市である。リマソールは商業の中心、そしてビーチや港があり、海の玄関口でもある。ビーチ周辺は多くのホテル、バー、ナイトクラブが軒を連ねる。観光やリゾートで訪れる土地のほとんどが、グリーンラインから離れて南側に存在するので、旅行で訪れてもほとんどの場合は安全である。

さて私の場合、成田からドバイへ約11時間、ドバイの空港で3時間30分の待機ののちに、ドバイからラルナカ国際空港へ約3時間30分のフライトで入国した。ラルナカから最終目



船で沖へ出て泳いだ地中海

的地のリマソールまではタクシーで約1時間であった。リマソールに到着するまでの間、山岳地帯が多いと言われるままに、山肌がところどころ露出した、殺風景な道路をひたすら走った。ずいぶん遠くまで、しかも日本とは全然違う国に来てしまった、と実感し、圧倒されてしまいそうだったが、いざホテルに到着すると、ビーチが目前にあり、眩しい太陽と抜けるような青空に心が躍った。

学会会場は、13世紀の建造物のコロッシ城(十字軍の基地になつたらしい)であったし、学会主催のレセプションでは地中海クルーズを経験したし、クリオンの古代遺跡で民族衣装と伝統的な踊りを見学した。空いた時間には、大型タクシーで各地の古代遺跡を巡り、地中海で泳ぐツアーに参加した。海水が非常

に塩辛く、それゆえあまり生物が住みにくいのか、海水の透明度が高く、ビーチから離れた海は、溜息が出そうなほどに綺麗なコバルトブルーであった。食はシーフードがメインで、食の欧米化が進んでいると言われている日本人には馴染みやすいものであった。このように、学会そのものがひとつのツアーのようであった。訪れた名所、体験したことのひとつひとつに触れていては、とてもキリがなく、キプロス旅行記の大作が出来上がってしまいそうなので、思い出の写真を載せるに留めることとしたが、滞在した感想は「キプロスには永住してもいい」というものである。とにかく、たとえ日本から遠くてもキプロスは魅力溢れる国であった。

肝心の発表そのものは、ほろ苦いデビュー



古代遺跡周辺の海 (キプロス, パフォス地区)

戦となった。持ち時間15分の症例報告であり、英語で長い時間喋り続けなくてはならなかった。自分が流暢ではない英語を喋っていることは自覚していたし、そういう意味では、誰にも期待されていないだろうと思えたので、英語で喋り続けること自体は大して気にならなかった。しかし、質疑応答では、せっかくフロアから質問して下さった先生の英語がほとんど聞き取れず、“I’m sorry, but I don’t know...”と答えかけたところで座長の先生が変わりに返答して下さった。若くてあまり上手くない英語を喋る日本人の発表であったので、周囲の先生方も気を遣って下さったのであろう。これも、期待されてはいないだろうとは思えたが、少し悔しさが残った。

反省し、自分なりになぜ答えられなかったかを考察した。想定される質問は国際学会であっても大きくは変わらないので、想定質問を頭に入れ、さらにそれぞれの質問の中でkey wordsとなる言語を意識して覚えて質疑

応答に臨むと、すべてを聞き取れなくてもkey wordsは聞き取れ、質問の意味を類推して答えることができたのではないだろうか。例を挙げると、私の発表は小児の結腸憩室炎の症例報告であったが、憩室diverticulumと重複腸管の鑑別について質問されることは予想された。この場合、重複腸管を示すduplicationという単語を意識して覚えておくと、質問の中でduplicationを聞き取れたならば、diverticulumとduplicationの鑑別について聞かれていると類推できたのではないかと、ということである。流暢な英語である必要はなく、ゆっくり話し聞き取れる単語やフレーズを増やしていくこと、これが、国際学会で必要なことではないかと考えた。英語をどれだけ自分のものとして操れるかは個人差があるだろうし、ネイティブの人との間には何十年かかけても壊せない言葉の壁が存在しているだろうが、自分なりのやり方で欧米諸国の先生方に食らいついていくことは、労は多くても難しくはなさそうである。

このように、初めての海外と国際学会を大いに楽しんで帰ってきた私であった。海外旅行や国際学会に限った話ではなく、何かを始めるのに、「早過ぎる」ということはなく、とりあえずやってみるとなんとかなるものである。つまりは、やったことのないことに対する不安や恐れは、まずやってみることで払拭される。「何事も、経験」。使い古されたフレーズでもあるが、要するに昔から、そういうことが大切なのであろう。昔と言え、今年には明治維新から150周年の節目を迎える。多くの維新志士を輩出した鹿児島から、かつての維新志士がそうであったように、欧米諸国に追いつき追い越さんと、国際学会にも積極的に参加していきたい。次回はどんな場所に行き、どんな経験ができるのか、大いに楽しみである。

次号は、鹿児島大学病院の市地さくら先生のご執筆です。
(編集委員会)



学会の看板と私